

『男女逆転法』

いかなる場合においても女性の立場は男性より上になる。

西暦2XXX年。

長年懸念されてきた男性遺伝子の弱体化が深刻化し、男性の出生率が急激に低下する現象が起きていた。

出生率をあげようと政府が様々な政策を試みるも、生まれてくる子供は女の子の割合が多くを占め、現在に至っては9割が女の子が生まれてきてしまうと言う事態が起きていた。

このまま年月が進めば、人類の滅亡は時間の問題と判断した政府はある斬新な政策を立てたのであった。

その名も「男女逆転法」

その名の通り男と女の立場を入れ替える

政策であり、その中でも大きく変わったのが、
性行為だった。それはなんと女性が男性を
妊娠させる、と言うものであった。

遺伝子の組み替えを数十年にわたり研究し、
ついに女性が男性を妊娠させることに成功した
政府はすぐにこの研究を世に発表した。

しかし、この世には長年続いてきた男性が社会で
優位に立っていた歴史があり、

男性が妊娠をするなど断固として

反対する者がほとんどであり、なかなか方策が
浸透していかなかった。

そこで政府は男性が女性に絶対に
逆らえなくする為の特別方策を取ったのだ。

男女逆転法

第一条

男子を強制的に○学校へ落第させ、

そこで「女稚生徒」として生活させること。

「女稚生徒」とは文字の通り稚い女子、

つまり女子生徒より立場の幼い生徒の事だ。

女子生徒より低い立場を経験させることにより、

「女子は男子に逆らえない」と言う風習を

根付かせる為の方策だ。

ここでは、男女逆転法により落第させられた

男の子2人の事例を見て行く。

「はい。皆さん静かにしてください。朝の挨拶をしましょう」

「おはようございます!」

女の子の可愛らしい元気な声が教室に響く。
どうやらこのクラスは女の子だけのようだ。

「今日は大事なお話があります。テレビで見た人もいますが、
今日から男女逆転法が適用されます。なので今日からこのクラスに男の子が
2人落第してきますので紹介します。
それでは教室に入ってきてください。」

「失礼します。」

教室に入ってきたのは昨季高校を卒業したと思われる男子2人だった。



「では、自己紹介をお願いします。」



「同じく落第生になりました、
小宮薫です」



「今年から落第生になりました、
水谷遥です」



いかにも〇学生の女の子らしい服装は、男女逆転法により政府から支給された洋服であったが、2人には小さいサイズに見える。



小宮薫は屈辱的な表情を浮かべ、水川遥は不安そうな表情を浮かべていた。

「へー。あの子たちが噂の……」
「男子のくせに背ちっちゃいのね」

「本当に年上？」

ヒソヒソと2人を見た生徒たちの声が微かに聞こえる。

（くそっ……。なんで俺がこんな格好しなきゃいけないんだ……。！）



「今日から一緒のクラスでお勉強することになりますので、
皆さん仲良くしましょうね。」

「はい！」

無邪気で純粋なクラスの子供たちの声は2人の羞恥心を余計に煽るばかりであった。



「この式にこの値を当てはめてあげれば……」

2人は他の〇学生と一緒に普通に授業を受けていた。

強制落第制度とは言え、同じクラスの一員として2人は他の生徒と一緒に平等に扱われていた。

そう、あ…あの事件が起こるまでは。



高校を既に卒業している2人にとって、

○学生の授業は流石に容易であった。

「大変なのは女子の格好をするぐらいで、

勉強はやっぱり簡単じゃないか」

表情に余裕の見える二人だが、
授業が残り10分に差し掛かると次第に表情が曇り始めた。



「何だか、おしっこがしたくなってきちゃった……」
2人は尿意を催していたのだ。

学校内では女の子の身なりをしている為、
性別は一応「女子」として扱いを受ける。

当然、トイレも女子トイレに入らなければいけない決まりだった。
トイレに行く為に教室の外に出るだけで好奇の目を浴びてしまう為、
女子トイレに入るなど、2人には到底出来なかった。

そのため朝から一度もトイレに行けなかった二人は、
ここに来て強烈な尿意に襲われていた。



「大丈夫だ、あと10分だけなら我慢できる。」

そう薫は自分に言い聞かせ、

なんとか尿意を耐える事ができていた。

しかし隣で遙が明らかにソワソワし始めた後、
うめき声を漏らした。

「あっ……もうダメっ……」





遙は我慢できずにその場でおもらしをしてしまった。

くすん、くすんと泣き声を漏らしながら、
体を震わせていた。

まさか、この年にもなって授業中におもらしをするなんて
思っていなかった薫はかなり驚いた様子だった。

（何やってんだよ、遙！）

小声で遙に声を掛けた薫だったが、その声は届いていない。



他の生徒が遙の様子に気が付き、教室が少しずつざわつき始める。

「遙ちゃん、どうしたの？」

「あれ？もしかしておもらししてない？」

遙のせいで、薫まで焦りと緊張が高まる。

その瞬間、薫は一瞬、自分の尿意から気が逸れてしまった。

そして次の瞬間……

「あっ！」





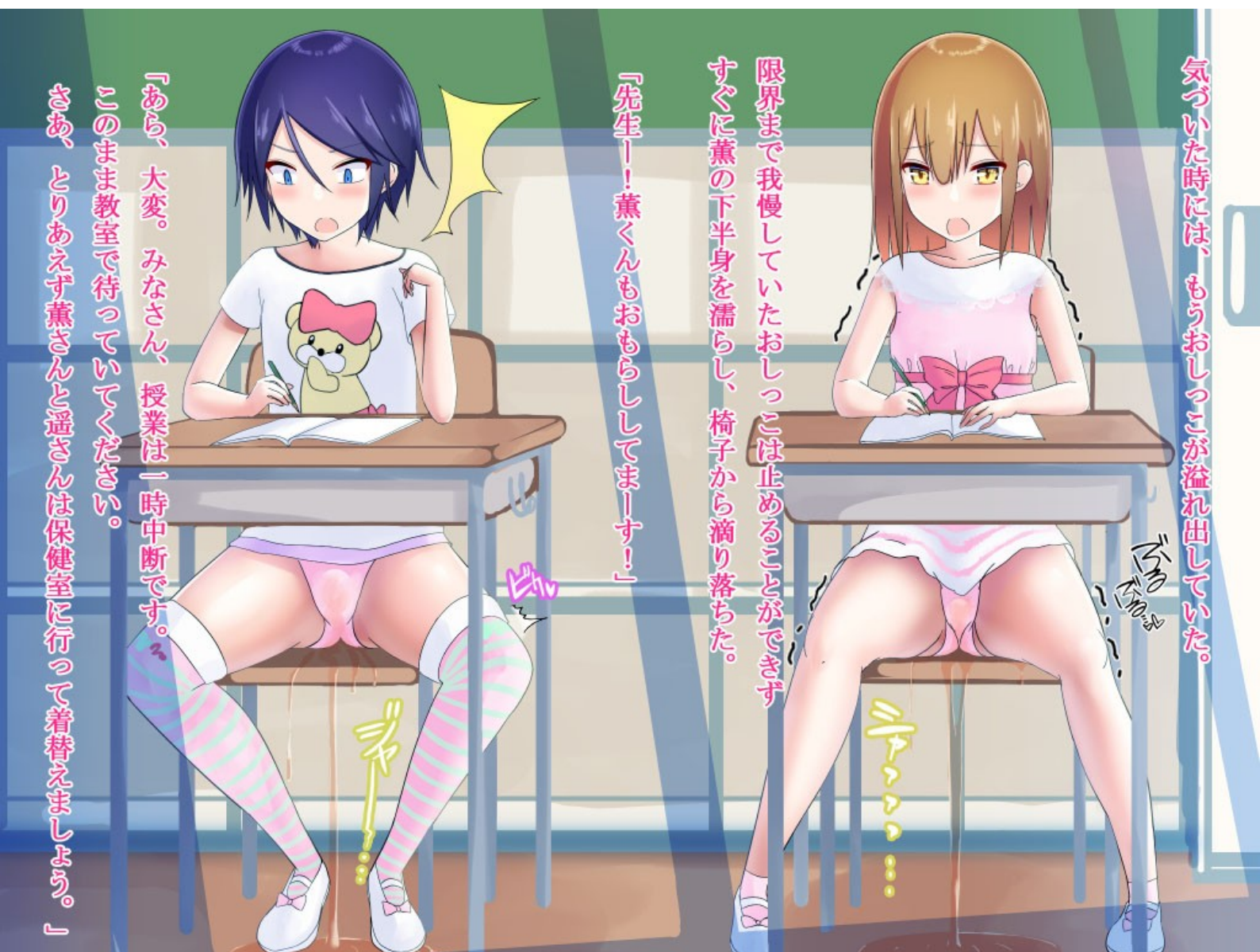
気づいた時には、もうおしっこが溢れ出していた。

限界まで我慢していたおしっこは止めることができず、
すぐに薫の下半身を濡らし、椅子から滴り落ちた。

「先生ー！薫くんもおもらししてまーす！」

「あら、大変。みなさん、授業は一時中断です。
このまま教室で待っていてください。」

さあ、とりあえず薫さんと遙さんは保健室に行って着替えましょう。」



薫と遙は優しく先生に手を引かれて保健室に向かった。

高校を卒業している年齢ではありえない失敗を
してしまった2人だったが、この目までは担任の教師も、
普通の生徒達と同じように、優しく接してくれた。

しかし次の日から、2人に対するは接し方は一変するのであった。



男女逆転法

第二条

女稚生徒が粗相をした場合には
指導を必ず実施すること。

また、女子生徒の目の前で指導を行い、
羞恥心を感じさせること。

「はい、皆さん授業を始めますよ。おっとその前に・・・
薫さんと遙さんが教室でおもらしをしてしまったことは
皆さん知っていると思います。」

こう言うことが起きた場合、男女逆転法では皆さんの目の前で
女稚生徒の子たちの指導をしなければいけません。

なので、今日の授業は女稚生徒の2人におトイレの仕方を
教えてあげましょう」

「はい！」

（トイレの仕方を教える？何をする気なんだ・・・）

突然の出来事に驚いた薫。直観的にとてもない嫌な予感がしたが、
その予感はすぐにに的中した。

担任の教師は徐に何やら白い色をした大きめの何かを持ってきた。
通常のサイズより少し大きめだったそれだったが

薫と遙にはそれが何かすぐに分かった。

「それでは薫ちゃんと遙ちゃんは
お・ま・る・に・跨・が・つ・て・く・だ・さ・い・ね。」

(き、聞いてないぞ！こんなことさせられるなんて！)
これからここで赤ん坊のようにおまるに跨り、

トイレの練習をさせられる事を薫は瞬時に察知した。

教室から一刻も早く立ち去りたかったが、当然そんなことはできず、
その場で立ち尽くしていることしかできなかった。

「どうしたんですか？薫ちゃん。」

これはあなたがちゃんとおトイレでおしっこできるように
するための授業なんですからね？」

「で、でも・・・みんなの前ではちょっと・・・」

「もう、仕方ないわね。」

薫が戸惑っているのを見ると先生はすぐに薫の足を持ち上げ
軽々と抱き抱えてしまった。

「ほら、一人でおしっこできないなら先生が手伝ってあげるから」

「ちょ、ちよつと！こんな格好嫌です！」

「嫌だつて言っても、薫ちゃんは一人でおしっこできないんだからしょうがないじゃない。」

（こんな恥ずかしい格好見られながらおしっこなんてできるわけがないだろ！）

「お隣を見てもらいなさい。遙ちゃんはちゃんとおまるに跨っているわよ。」



ふと目を横にやると、遥がおまるに跨っていた。

(何やってんだよ遥！
簡単に言いなりになってんじゃねえよ！)

遥に小声で話しかける遥だったが、
その言葉は耳に入っていないようだ。

遥は元々、真面目な性格もあり
周りの言うことを素直に聞いてしまった。
やがて遥は何かを諦めた表情になり、おしっこを始めた。





「キヤハハハ！本当におしっこしてるよー！」

「あらあ。遙ちゃんは一人でちっちゃくて偉いわね。」

「薫ちゃんも遙ちゃんみたいにおまるにちっちゃできるかな？」

「嫌だ！こんなところで絶対にするもんか！」

すると先生が薫の耳元で囁き始めた。



「ほら。大丈夫だから。緊張しないで良いのよ？」

「おまるに向かって
せーの、しいーしいー」

耳元でささやかれ、ソクソクと
脳が痺れるような感覚に薫は襲われた。
その瞬間、尿意から意識が逸れてしまった。

「だ……だめえっ……！」





弧を描くように勢い良くおしっこは出てしまった。

「わあ・・・

本当にダラしないんだね、男の子って。」

いっやあぁあ

（ああ・・・ダメだ・・・）

恥ずかしいのにおしっこ止まらない・・・）

「うふふ。偉いわよ、薫ちゃん。ちゃんとおしっこできたじゃない。」



「本当におしっこするなんて信じられないーい」

「ひとりでおしっこできないなんて
ホントありえないわー」

いっやあああ

薫と遙はクラスの皆から笑いにされながら、
おしっこが終わるまで恥ずかしさを堪えることしか出来なかった。



男女逆転法

第三条

女子生徒には早めの性教育を実施すること。
また、女稚生徒がいる場合は女稚生徒を
教材として積極的に扱い、男女の格差を
学ばせる事。

「さあ、みなさん。今日は性教育の授業です。
教室の前に集まってください。」

今日はクラス担任ともう1人、保健の先生が
同行して授業を進めるようだ。



薫と遥を除くクラスの全員がいつもより
嬉しそうな表情を浮かべている。

それもそのはず、昔は男子が性教育を楽しみにしていたように、
現在では男女逆転法により、女子の方が性に対して積極的なのだ。

「あら、なんだか皆さん楽しそうですね。
という事は性教育については皆さんもなんとなく
ご存知のようですね。

性教育は、男女逆転法が適用されてから
非常に大切な授業になりました。

男性の遺伝子弱体化が進む中、
人類が繁殖をして行くには
私達、『女性』が男性に
子種を授けることが大切です。

それでは早速、
授業を始めていきますね。

今日の性教育は『女稚生徒』のお二人を題材にして進めていきます。



「おっとその前に、ついこの間、薫ちゃんと遙ちゃんが授業中におもらしをしてしまったのは覚えてますよね？」

「また教室で失敗されては困るので、2人にはおむつを穿いてもらうことにしました。」

「へえ。おむつ穿いてるなんて赤ちゃんみたいだね先生。」



「うふふ。良いところに気が付きましたね。」

常に女性の方が立場が上である事を分らせるには、
ぱっと見て分かる格差が必要なんですよ。」

「おむつは格差を分らせるには1番有効です。」

薫ちゃんと遙ちゃんの体が皆さんより大きくても、
おむつをしていれば、皆さんよりも立場が下であると
すぐに分かりますよね。」

「なるほど！確かに分かりやすいです！」



「先生！薫ちゃんと遙ちゃんのおむつなんだか膨らんでませんか？」

2人は心因的なショックにより、おもらしを繰り返すようになっていた。

もちろん、未だにトイレに行くのが恥ずかしくて行けていないと言う事実もあった。



「はい。そうです。皆さんもよく見てみてください。
おしっこでおむつが膨らんでいますよね。」

「ここのおしっこサインが青色になっていますよね。
これが一目でおもらししているかを見分けるポイントです。」

「トイレの授業やってあげたのにおしっこもまともにできないんだね」

「この年にもなっておむつしてる人初めて見たわ」

ヒソヒソと2人を馬鹿にする声が聞こえ始める。



「皆さん。いくら男子の立場が下でも、将来的には彼らが子供を産むのです。」

「なので当然ですが皆さんが女稚達のお世話をする時が必ず来ると言う事なんです。」

「なので今日はおむつ替えのやり方を教えますね」

「ではまず、おもらししちゃったおむつを外しますね。」

「ちよつと待っ」





教師の2人は抵抗する前に素早くおむつのサイドを破ってしまった。
薫と遥の男子としては小さめのサイズのペニスが露わになる。

「はい、皆さんも知ってると思いますが、これがおちんちんです。
皆さんの中にもおちんちんを生やす手術が終わってる人も
いると思いますが、改めて確認していきましょう。」

男女逆転法が適用されてからは女性にペニスを生やす技術が
確立されていた為、すでにペニスを持っている生徒も多く存在する。



「なんか薰くんと遙ちゃんのおちんちんって思ってたより小さいのね」
「男子だからもっと大きいの期待してたのに期待外れだわ。」
「これだったら妹のおちんちんより小さいかも。」

恥ずかしさで居ても立つても居られない2人だったが、
抵抗すればおもらしをした時のような辱めが待っていそうで
何もすることができなかった。

「さあこのままだとおしっこでお股がかぶれてしまいます。
なので、まずおしっこを拭いて行きましょう。」



「うっ・・・あっ・・・」

教師の2人はペニスをわざとらしく撫で回したり、
時にはつまむように動かす。

そのいやらしい手の動きに少し感じてしまい、
思わず声が漏れる。

「いやんっ、やあっ」

遙に至っては女子みたいな声まで出していた。



「せんせえ、も、もう大丈夫だからっ」

「あら？こんなにちっちゃい子供おちんちんのくせに
一丁前にかんじちゃってるのかしら？」

「うふふ。この程度で感じちゃったのかしら？
まあ、こんなおちんちんじゃしようがないわよね。」

「では、おちんちんが綺麗に拭き終わったら、
新しいおむつを穿かせてあげましょうね。」



「はい。これでおむつ替え終わりです。」

テストに出ますから、皆さんちゃんと覚えておきましょうね。」

「はい！」

「くまさんのおむつなんだね」

「なんだか赤ちゃんみたいでかわいいね」

（くっ、なんでこうも子供っぽいデザインなんだよ・・・）

新しいおむつには可愛らしくくまのプリントがされていた。
おそらく子供用おむつの一番大きいサイズだと思われる。



クラスメイトの目の前でおむつ替えをさせられると言う恥辱を
味わった薫と遙。

しかし、2人は「恥ずかしさ」よりも、濡れたおむつの不快感から
開放された「快感」の方が勝っていた。
本人たちは気づいていないようだが、確実に精神が
幼児退行しているようだった。

しかし、今回のおむつ替えと言う恥辱は2人にとっては、
まだまだ序章に過ぎなかった。
次の目の授業から2人は、本当の男女格差を思い知る事となる。



男女逆転法

第4条

女子は○学生の内から性行為の実習を行い、
性行為に対する理解を深めると共に、
性器の成長を促進させること。



「はい、今日は昨日に引き続いて性教育を行います。
皆さん、教室に前の方に集まってください。」

「薫ちゃんと遙ちゃんはこっちに来てください。」

教師2人に呼ばれ、薫と遙は先生の膝上に座らされた。

「今日はいよいよ『セックス』についての授業をします。」

「やったー！いいよだね！」

「せっくす楽しみ〜」

クラスの女子生徒たちがはしやぎ始める。
薫と遙は嫌な予感しかしなかった。



「セックスと言うのは子供を作るために行う行為の事です。
皆さんが将来、子供を授かりたいと思った時に
必ずやらなければいけません。」

この授業も当然テストに出ますから、
皆さんしっかりと見ていてください。

「では、まず昨日のおさらいからです。」

おむつを外して女稚生徒のお二人のおちんちんを見ていきましょう。」





もはや当たり前のようにクラスの生徒達の前でおむつを外され、
ペニスを晒される。

「あー今日もおもらししてるー」

「これじゃあホントにおむつ外れなくなっちゃったんだね」

「赤ちゃんみたいでかわいいね」

二人はもはやこの状況に少し諦めがついている様子だった。



「はい。昨日も授業でやった通り、これがおちんちんです。皆さんの中にも既におちんちんがついている人もいます。」

「セックスっていうのは、子供を作るために必要な行為です。」

簡単に説明すると男の子のお尻の穴に勃起したおちんちんを入れるんですよ。」

教師がそう説明すると薫と遙の背中あたりで何かがモゾモゾと動き始め、教師の呼吸が荒くなり始めた。
やがてソレは硬さを増してどんどん大きくなって行った。





薫と遙とは比べものにならないくらい巨大なペニスが二人の股の間から出てきた。あまりの大きさに驚きを隠せないでいる。

「わぁー！先生のおちんちん大きいね！」

「あはは！薫ちゃんと遙ちゃんのおちんちん隠れちゃったね！」

「おちんちんは興奮すると、このように大きく固くなります。固くなる事でお尻の穴におちんちんが入りやすくなるんですよ。」



「では実際におちんちんをお尻の穴に入れて行きましょう」

「ひいっ！怖いよお！」

「やだ！先生やめてよ！」

怯える薫と遙だったが、その声を見無視する様に教師二人は
一気にペニスを挿入した。





「ひびくっー」
「いやあっー！」

今までに感じた事のない太さのモノがアナルに
無理矢理ねじ込まれ、二人は思わず悲鳴をあげる。

「嫌だあああ！抜いてえー！」
「ひぐっ・・・痛いよおー！」



泣いて喚いても教師の二人は止めなかった。それどころか
薫と遥のアナルに栓をする様に、ペニスがどんどんと
大きくなっていく。

「はい。今おちんちんがお尻の穴に入りました。
みんなも今度実際にやることになりますから、
しっかり見ておいて下さい」

「おちんちんをお尻の穴に挿入したら、
次は腰を上下に動かしてみてください。」



「こうやっておちんちんに刺激を与えて行くと、
だんだん気持ち良くなってきますからね」

薫と遙にとって初めて入れられたペニスの感触は、
とてもじゃないが、痛みと不快感の方が強かった。

だが、次第に教師の大量のカウパーで腸内がペニスと
馴染んでくるとだんだん快感が訪れてくる。



「あつ、やんっ！んっっ！」

先程までは不快感による悲鳴や嗚咽だった声が激しくナカをかき乱され、自分でも思っていないような喘ぎ声を出してしまう。

「うふふ、あなた達もだんだん気持ち良くなってきたみたいね♡」

「はあ・・・♡私も精子のぼってきたわぁ♡」

「気持ち良さが頂点に達するとおちんちんから白い液体、『精液』が出てきます。この精液を出す事を射精と言います。それではこれから射精しますから、よく見ておいってくださいね。」





「はい。これが射精です。男の子のおしりの中で射精すれば、
「申出し」とも言います。」

「良いなー私も早くやりたい！」

「私も勃起してきちゃったかも」

教師二人のピストンにより薫と遙はメスイキをしてしまった。
初めての快感に頭が真っ白になる。



「薫君と遙ちゃんってもしかして射精してるの？」

「皆さんが申出しをして行けば、いつか薫ちゃんも遙ちゃんも

「薫ちゃんと遙ちゃんは子供を授かるには、まだまだ成長段階なので

「次の性教育の授業いつかなあ？」

（こんなことが……ずっと続く……のか？）

ぼんやりとした頭の中で、おさまらない快感にしばらく放心状態の薫と遥であった。



男女逆転法

第五条

女子は男子に対して日常生活において
立場の格差を理解させる為に行う性行為は
刑罰の対象にはならない。

キンコンカンコン

ある日の朝、遙の下駄箱に一通の手紙がおかれていた。
手紙には一言だけ、

「放課後、視聴覚室に来なさい。」

とだけ書かれていた。

宛名は書いておらず、誰からの手紙か分からなかった。

しかし、男女逆転法が適用された今、たとえただの手紙であってもこの学校で
命令に背く行為は危険だと判断した遙は恐る恐る視聴覚室に向かったのであった。

ガラガラ・・・

「やっと来たわね。遅いわよ、全く」

少し不機嫌そうな表情で待っていたのは同じクラスの沙耶（さや）だった。
沙耶はクラスの中でもやんちゃな性格で人気者である。



「ごめん、沙耶ちゃん」

沙耶の不機嫌そうな表情に怯え咄嗟に謝ってしまう遥。
既に遥との上下関係は確立しているようだった。

「なんで視聴覚室に僕を呼んだの？」

「あーそれなんだけどさ」

沙耶は遥に近づき背後へ回る。



「この間、セックスの授業あったじゃない？あれ見てからなんだかムラムラしちゃってさ。」

「え……？」

遥の腰のあたりに固いモノ当たる。

紛れもなくその感触は男子が持つアレの感触だった。

「私もうおちんちんの手術終わってるんだよね。あんな授業見せられたら勃起が収まらなくなっちゃってさ、ちよっと相手してくんない？」



すると沙耶は遙のパンツを脱がし、遙よりひと回り大きいペニスを股の間に入れた。

「ひいっ。沙耶ちゃん何するの？」



「大丈夫、入れはしないから。本当の楽しみはセックスの実習まで取っておくつもりだから。」

「だから今日は遙ちゃんにお股でヌいてもらおうと思うの。」

「で、でも僕、素股なんてしたことないよ。沙耶ちゃんを気持ちよくさせるなんてできないと思うから、やめておいた方が・・・」

「ゴチャゴチャうるさいなあ。良いから早くヌかせてよ」

沙耶は遙の言葉を遮ると、無理矢理遙の股でペニスを扱き始めた。

ズグッ



「どう？私のおちんちんは？遙ちゃんよりずっと大きいでしょ。
悔しかったら遙ちゃんも勃起してみたら？」



しかし、遙は既に勃起していた。
ペニスが小さいあまり、沙耶に勃起していると思われるなかったのだ。

「あれ？もしかしてその大きさに勃起してた？あはは！ホント情けないおちんちんね」

遥の自尊心を傷つけるように沙耶は嘲笑った。

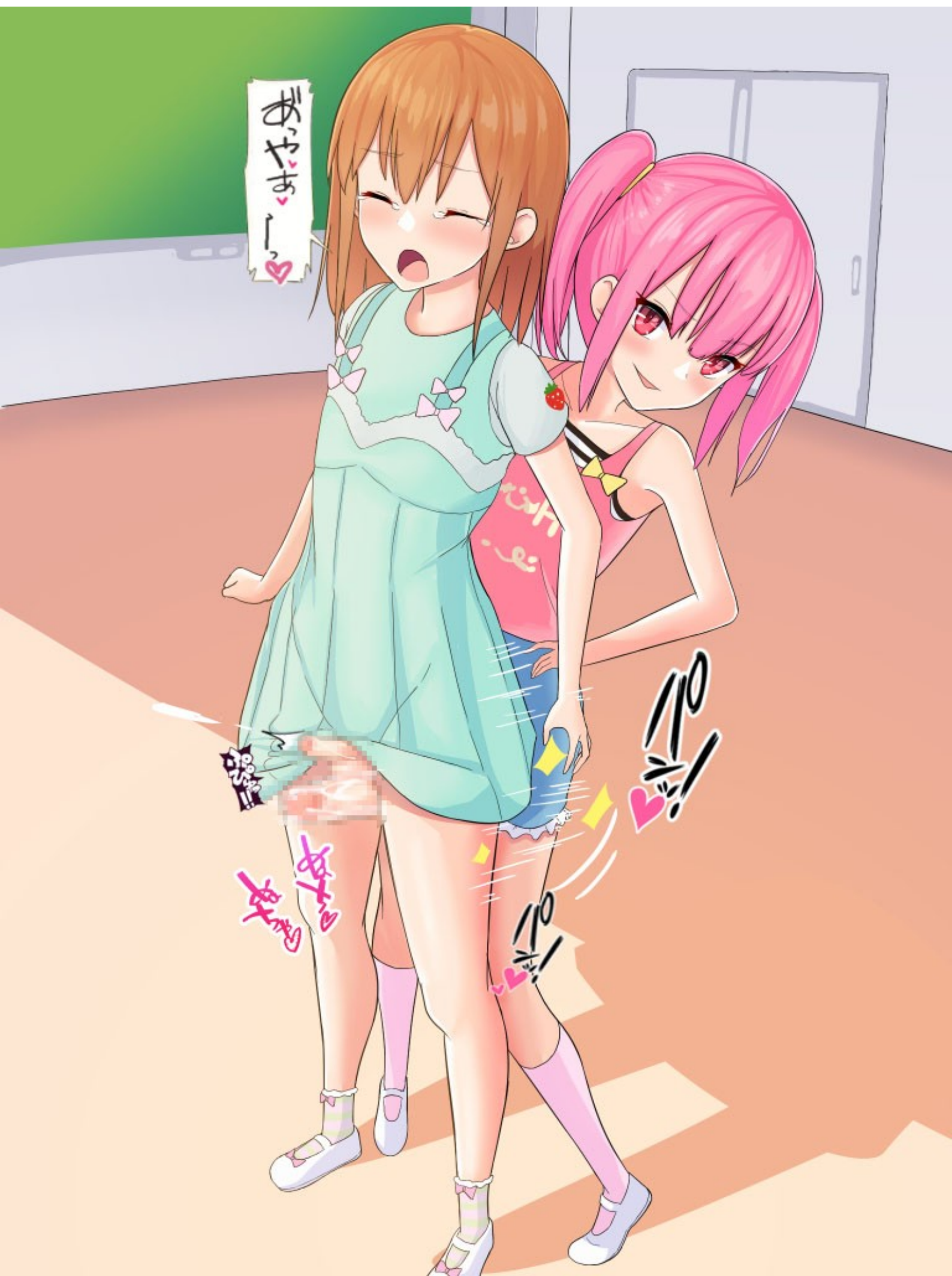
次第に沙耶の巨根から溢れる我慢汁で滑りが良くなってくる。
それに連れ、沙耶の腰の動きも激しくなっていく。



遙の尻に強く腰を打ちつけ、本当にセックスをしているような感覚になる。
少しでも腰の位置がずればアナルに入ってしまったしうになる。



「ほら、もっとお股で締め付けなさい！じやないといつまで経っても終わらないからね！」
そう言われて遙は内股に少し力を入れると、遙のペニスと沙耶のペニスが密着する。
すると、敏感になっていた遙のペニスはすぐに絶頂を迎えてしまった。



「あれ？もしかして射精しちゃった？てかそんな量しか射精できないのね。
そんなだから落第なんかするのよ。」

「いい？見てなさいよ？

本当の射精っていうのは、
こういうのを言うのよ！」





遥の何倍もの量の精子が沙耶のペニスから飛び出す。
あまりの精子の量に遥は驚きを隠せなかった。

「うふふ。これだけの精子を遥ちゃんに
中出ししたらどうなっちゃうかしら。
一発で妊娠しちゃうかもね♡」

ビュルルルル♡

ふんふん♡

うわっ♡



沙耶に圧倒的な差を見せつけられ、遙は改めて男という人間が
どれだけ弱体化したかを自覚した。

「ふふ。今度のセックスの授業が楽しみなね♡」
遙はしばらく劣等感と恐怖でしばらく
立ち尽くしていることしか出来なかった。

ビュルルルル♡

「んんん♡」

「んんん♡」



「うーん。むにゃむにゃ」

ある日の昼休み。薫は保健室で寝ていた。

恥辱の数々を受けなければいけない日々の中で、
昼休みに保健室で寝る事が薫にとって唯一の助けとなっていた。

薫が眠っていると、何やら人影が現れ、ガサゴソと物音をさせていた。

「ん……？なんだ……？」

寝起きのぼんやりとした頭の中で
自分の身体がうまく
動かせない事に気がつく。

手には何やら紐のようなモノで
縛られている感覚がある。



だんだん目が覚めてくると手が縄跳びで縛られていた事に気が付く。
「な……なんだこれは……？」

そして背後の人の気配に気が付いた。
小さく「ハアハア……」と荒くなった
息遣いが微かに聞こえる。



「あつ、起きてしまいましたか？薫さん」

薫が後ろに目をやると、そこにはクラスで一番の優等生である「真希」がいた。

真希の下半身は裸でペニスをパンパンに勃起させている。目は据わっており、理性を無くしているような様子だった。この状況が危険であるという事を薫はすぐに察した。



「な、何をする気だよっ」

「先ほどの性教育の授業で私、とっても興奮してしまいましたの。
そのせいでどうしてもコレが納まりがつかなくなっちゃってしまっただよ」

「性教育の授業を受けたら、

勃起してしまうのはしょうがない事ですよ。

これじゃあ午後の授業に集中できないので、

一回射精して興奮を治めないとイケませんの。」



「だからって俺に無理矢理することが許されるとでも思ってるのか！」

「大丈夫ですわ。男女逆転法では、
男女の立場を理解させるための
性行為は刑罰になりませんわ」

「これはあくまでレ○プではなく、
私より薫さんの方が社会的立場が
弱いってことを分からせるために
やるんですから。」



「そんな取って付けたような理由が通じるわけないだろ！」

しかし真希は既に理性を失っているようで、
薫の言葉には全く頭に入っていないようだった。

「ああもう我慢できません！」

ちよつとの辛抱ですから、

我慢しててくださいね薫さん！」

「やめろおおおお！」





「あはっ。これがセックスというもののなのですね！
入れただけで射精しそうになってしまいましたわ。」

「は、早く抜けよ！」

「女稚生徒のくせに、

その生意気な言葉遣いは許せませんね？

お仕置きにもっと激しく突いてあげましょう！」





「うっ、ぐっあっ」

「薫さんすっごく気持ち良いですわ。」

私の精子を搾り出そうとお尻の穴が

イヤらしくキュウキュウ

締めつけてきますよ!」

真希の巨大なペニスは薫の前立腺を

ゴリゴリと刺激する。

悔しくも薫はだんだんと快感を感じ始め、

気づいた時には自分でも思っていない声で喘いでいた。

たの
あ
ん

たの
あ
ん

たの
あ
ん

ドンッ
ズッ

たの
あ
ん



「やつあつやめつああんっ」

「うふふ♡ずいぶんと可愛い声で泣くようになりましたね！」

「さあそろそろ私も精子がのぼってきましたわ♡
今から思いつきり中出ししますから、

そのイヤらしいケツマ○コで受け止めてください!」

あーんっ

필

410

はっちゃん

ドンッ

あんなに
たの



「おほおっ♡おっといけませんわ。
気持ち良すぎて下品な声が
出てしまいましたわ。」

薫のアナルには溢れ出すほどの大量の精子が
注ぎ込まれた。挿入による前立腺の快感と
腹の中に熱い液体が流れ込む不快感が混じり合い、
頭の中がぐちゃぐちゃになる。



「気持ち良すぎてまだ精子が止まりませんわ♡
お腹がパンパンになるまで
出してあげますからね」

「あ……あ……」

「うふふ♡これぐらいで妊娠しないでくださいね。

まだまだこれから何回も中出しさせて

もらうんですから。覚悟しておいてくださいね♡」



男女逆転法

第六条

女子生徒は性教育の実習を必須科目とし、
性行為に対しての理解を深めると共に、
生殖機能への成長を促すこと。

性教育の授業で薫と遙が教師に中出しされてから数日が経った。

クラス内ではセックスの授業がいつやってくるのかの話で持ちきりだった。

「噂で聞いたんだけど、今日がついにせつくすの授業らしいよ！」

「えー？本当？」

「私なんて待ちきれなくて昨日も3回も抜いちやったよ。」

薫と遙はなるべくクラス内の会話を聞き入れないようにしていたが、ついにその日が来てしまった。

教師がいつもよりテンション高めで教室に入ってくる。

「さあ。皆さんお待ちかねの性教育実習の時間です。

今日は皆さんに実際にセックスを体験してもらいます。」

「はい！」

「それではまず、今までの授業の復習から入りましょう。」

「薫ちゃんと遙ちゃんは
今日も懲りずにおもらししている
みたいなので
まずはおもらしチェックから
していきましょう！」





「もう当たり前のようにおもらししちゃってますね。」

おもらしなんて○学生だってしないのに。
少しは学習しないんですか？」

「おむつがこんなにパンパンに
なるほどおもらししたの？
もうおむつ無しじゃ
生活できないのね。」

沙耶と真希は自尊心をわざと傷つけるような言葉を掛ける。

薫と遙は恥ずかしさのあまり、
目も合わせることができず、
何も言い返せなかった。

「ではおもらししてることが
分かったら、おむつを外して
あげてください。」



「わあ。ずっしりね。これ3回はおもらししてるんじゃない？」

「あーあ。こんな歳にもなって

おむつが外れないなんて
はずかしいでちゅねー」

「毎日おもらししちゃってる

もんね。もうおしっこする感覚

忘れちゃったんじゃない？

じやなきやこんなにおもらし

しちゃうはずがないもんねー？」



薫と遙は度重なる失禁のせいで、すでに自分の尿意に気づけなくなっていた。

気付いた時にはもうおむつが濡れているという、本当の赤ん坊のような状態になっていた。

「薫ちゃんも遙ちゃんも、もうおむつが外れなくなってしまいましたね。」

このままだとかぶれてしまうので、赤ちゃんのおしりふきでお股をふきふきしてあげましょう。」



「ひゃんっ冷たい」

いつの間にか少女のような
反応をするようになってしまった遙。

濡れたおむつの不快感から
解放されたペニスは
敏感になっており、
出したくもない声が出てしまう。



「んっ・・・やっ」

「あれ、もしかして薫ちゃん、
この程度で感じてるの？」

「うふふ。こんな小さい
赤ちゃんおちんちんじゃ、
感じてしまうのも
無理ないですわ」



「男の子のおちんちは拭き終わりましたか？」

「本来はここで新しいおむつを
当てるのですが、今日はこのまま
セックスの実習に移りましょう」

「それではいいいよ、
皆さんの楽しみにしていた
『セックス』のお時間です。

今日は正常位の練習を
してみましょう。

では女子生徒の皆さんは
おちんちんをボッキさせて
みましょう。」



真希と沙耶は盛り勃ったペニスを
薫と遙の股間に押し付けた。
ペニスの大きさは二人の数倍はある。

改めて女子との生殖機能の
差を見せつけられ、二人は
自分が男であると言う事に
劣等感を感じてしまう。



「うふふ。もうちょっとだけ待っててくださいね。
すぐに私のペニスで気持ち良くさせてあげますからね。」

「ほらほらあ。」

これからこんなに大きい
おちんちんが薫ちゃんのお尻に
入っちゃうんだよ？」



「ひいっ！嫌あっ怖いよー！」

「や……やめて……お願いだから……」

怖がる二人を無視するように
教師は授業を続行した。

「はい！それでは皆さん！
お待ちかねのセックスです！
男の子のお尻の穴におちんちんを
入れてください！」





「ひゃあんっ！」

「んっあああっ！」

巨大なペニスがねじ込まれ、
2人の敏感な部分を
容赦なく刺激する。
薫と遥の身体は挿入した
刺激だけで軽く絶頂を
迎えてしまうほど、
敏感な身体になっていた。



「うふふ。入れただけでイッちゃったのですか？
まだまだこれからだと言っのに、情けないですね。」

「イッたのにそれっぽっちしか
射精できないなんて、しよばいおちんちんね！」

「二人ともおちんちんを
入れることはできましたか？
入れることが出来たら、
腰を前後に動かして
おちんちんを出し入れ
してみよう！」





「真希さんも沙耶さんも上手ですね。
しっかりパンパンと音が鳴るほど
激しく突いていますね。」

射精感が込み上げてくるまで
激しくピストンを続けましょう。
薫ちゃんと遙ちゃんも
自分たちだけ気持ち良くなって
いないで、きちんとアナルを
締め付けましょう！



「あはあ♡遙さんの未熟ケツマンコ
よくなじみますわあ♡

私の精子を絞り出そうと
キュウキュウ締め付けてきますわ♡」

「ほらほらあ！

こっちはおちんちん
ムカムカしてるのよ！
もっと気合い入れて
アナル締め付けなさいよ！」



「うふ♡そろそろ精液昇ってきましたわ♡
私の子種、遙ちゃんのケツマンコで
しっかり受け止めてください♡」

「私も射精しそうだわ。」

さあ薫ちゃん、

一発で妊娠しちゃうぐらい
大量に中出ししてあげるから
一滴もこぼしちゃダメだからね！」





「遙さんのケツマンコ気持ち良すぎですわ♡」
全然精子止まりませんわ♡」

ぽんぽん

ぽんぽん

「うふっ♡

生きの良い私の精子が
どんどんナカに注ぎ込まれて
行ってるわよ薫ちゃん♡」

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん



「はい。お二人ともよくできました。
ちゃんと申出してきたようですね」

「それでは申出しをした精液が
漏れ出さないようにおむつを
履かせてあげてください」



「はい。新しいおむつですよ？
柔らかくて気持ち良いですね？」

「あはは！こうして見ると
本当に赤ちゃんみたいね。
まあしようがないよね。
おトイレでおしっこ
できないんだから。」



無理矢理絶頂を迎えさせられた屈辱と

おむつをはかされた恥辱により、

薫と遙は自身が男であると言う自覚がほとんど無くなっていた。

肉体的にも精神的にも

○学生より劣っていると

言う事実により2人の精神は

正気を保てなくなっていた。



男女逆転法

第7条

女稚生徒を定期的に外出をさせる事。

周囲の人間に「女稚生徒」でという事を

容易に認知させるため、

幼稚な服装で外出させる事。



鳥のさえずりや子供の遊んでいる声が聞こえる。
ここはどこにでもある公園のようだ。

薫と遙が心地良い風に吹かれながら眠っている。

教師は薫と遙が昼休み中に眠っているのを良いことに、
二人を公共の場に連れきていたのだ。

「そう言えば、薫ちゃんと遙ちゃんがこう言う格好で学校外に出るのって初めてだったかしら？」

「そう言えばそうですね。通学中は女児服を

着ているので、普通の女の子と見分けが付きませんが、今日のようなベビー服は初めてですね。」



薫と遙は眠っている間に、『ベビー服』を着させられていた。

さらには赤ん坊を抱いて外出する時にしか使われない『抱っこ紐』に乘せられていた。



「ん……むにやむにや」

「あれ……外……？」

「あら。2人ともおつきしたかしら？」

寝起きのぼんやりとした頭でも、
ここが学校の外だと言うことに直ぐに気が付いた。



「やだっ！ここお外じゃん！」

「いやああっ恥ずかしいっ」

薫と遙はジタバタ足を動かすが、
抱っこ紐で吊られて脚が中に浮き、
何も抵抗ができない。



すると騒がしい様子に公園の中にいた家族連れが好奇の目で
ヒソヒソとこちらを見て喋っている。

「ママー。あの子もうおっきいのにな赤ちゃんの格好してるよ」

「あの子はきつと男の子だからしょうがないの。
体はおっきくても、赤ちゃんぐらいの事しかできないのよ。」



「じゃあ私の方がお姉さんだね！」

だって私、おむつじゃなくてもうパンツだもん。」

「うふふ。たしかにそうね。」

おむつ穿いてる子があなたより
年上なわけがないもんね。」

薫たちより明らかに年下の女の子が
得意げに母親と話していた。



「二人共とも恥ずかしがることなんて
ひとつもないのよ？」

「あなた達は女稚生徒なんだし、

おむつ穿いて赤ちゃんみたいな格好するのが
当たり前なのよ。」

「それよりも、おつきしたばかりでしょ。

ちっちゃしたいんじゃない？」



教師の二人は薫と遥のおむつを撫でて、
尿意に意識を向けさせる。

「ここでちっちゃしちゃっても大丈夫よ。

あなた達はおむつの取れない幼稚生徒なんだから。」

「ほら。しーしー!」

すっ
すっ

サス
サス

「やつ・・・ダメ・・・」

「しーしー言わないでえ・・・」

「こ、こんな知らない人達が見てる所で

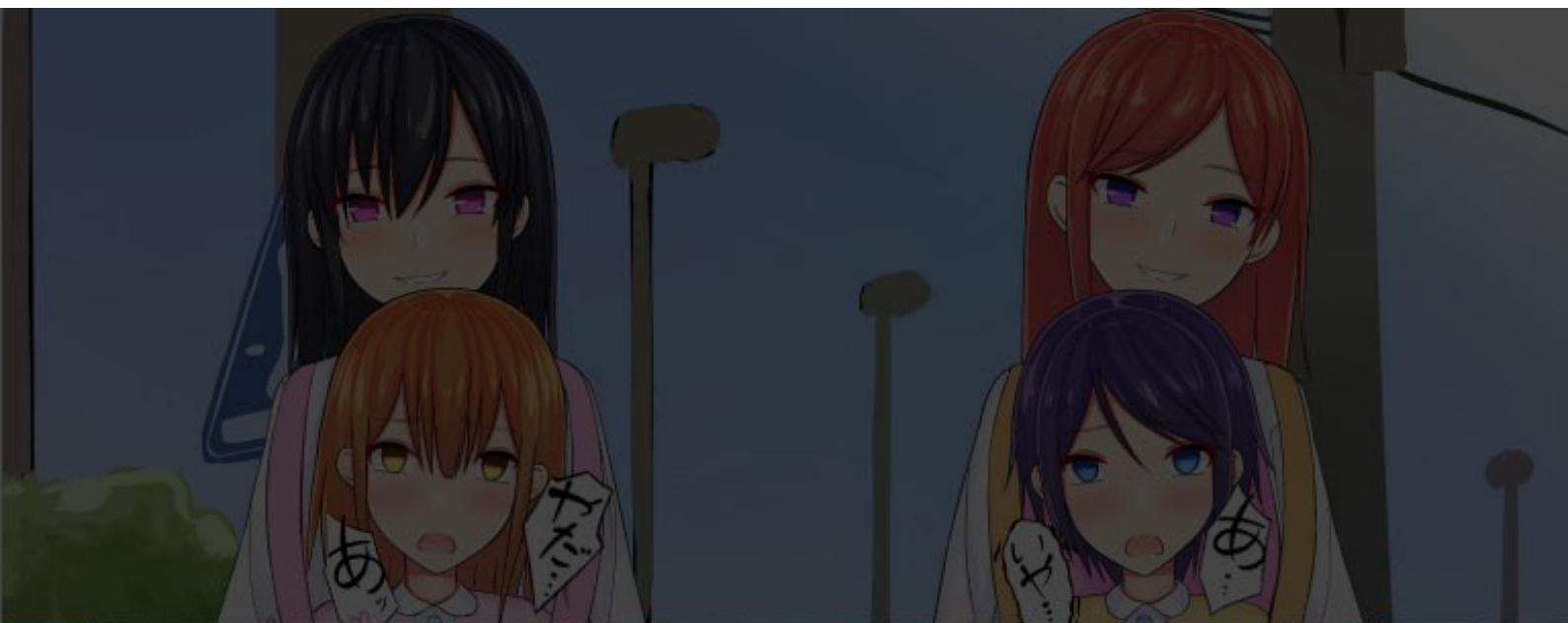
おしっこなんかしたくないのに・・・」

「ちっちゃいっばい溜まっちゃってるんでしょ？」

「ほら、頑張ってしーしー!」







薫と遙は条件反射のようにおしっこを漏らしてしまった。

「うふふ。おむつからしよおおって

音が聞こえるね？ いっぱいちっちが溜まってるのね。」

「ほら。我慢しなくていいのよ。おむつしてるんだから全部ちっち出しちゃいなさい。」

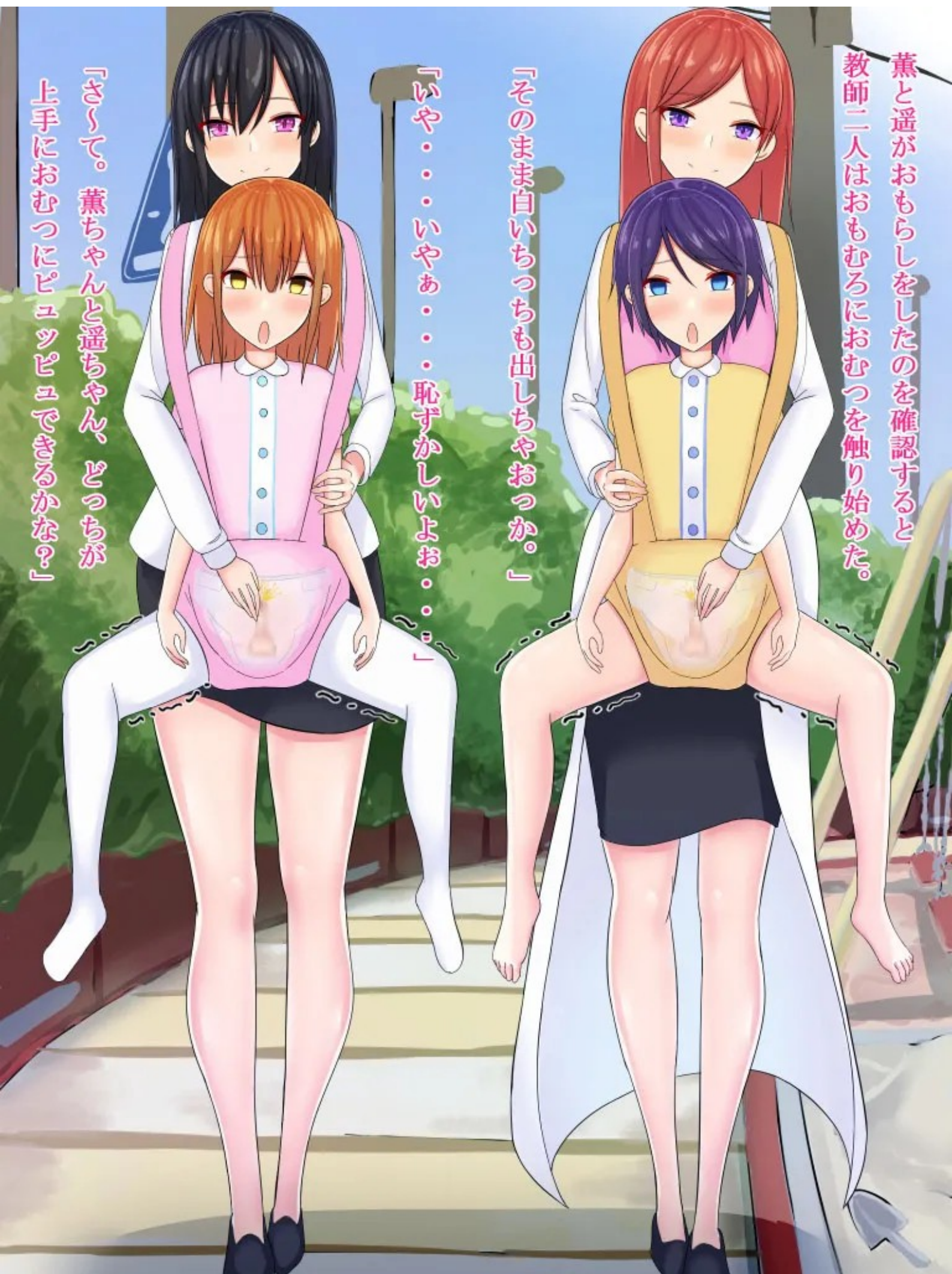


薫と遥がおもらしをしたのを確認すると
教師二人はおもむろにおむつを触り始めた。

「そのまま白いちっちも出しちゃおっか。」

「いや・・・いやあ・・・恥ずかしいよお・・・」

「さうて。薫ちゃんと遥ちゃん、どっちが
上手におむつにピュッピュできるかな？」



段々と手の動きが強くなる。

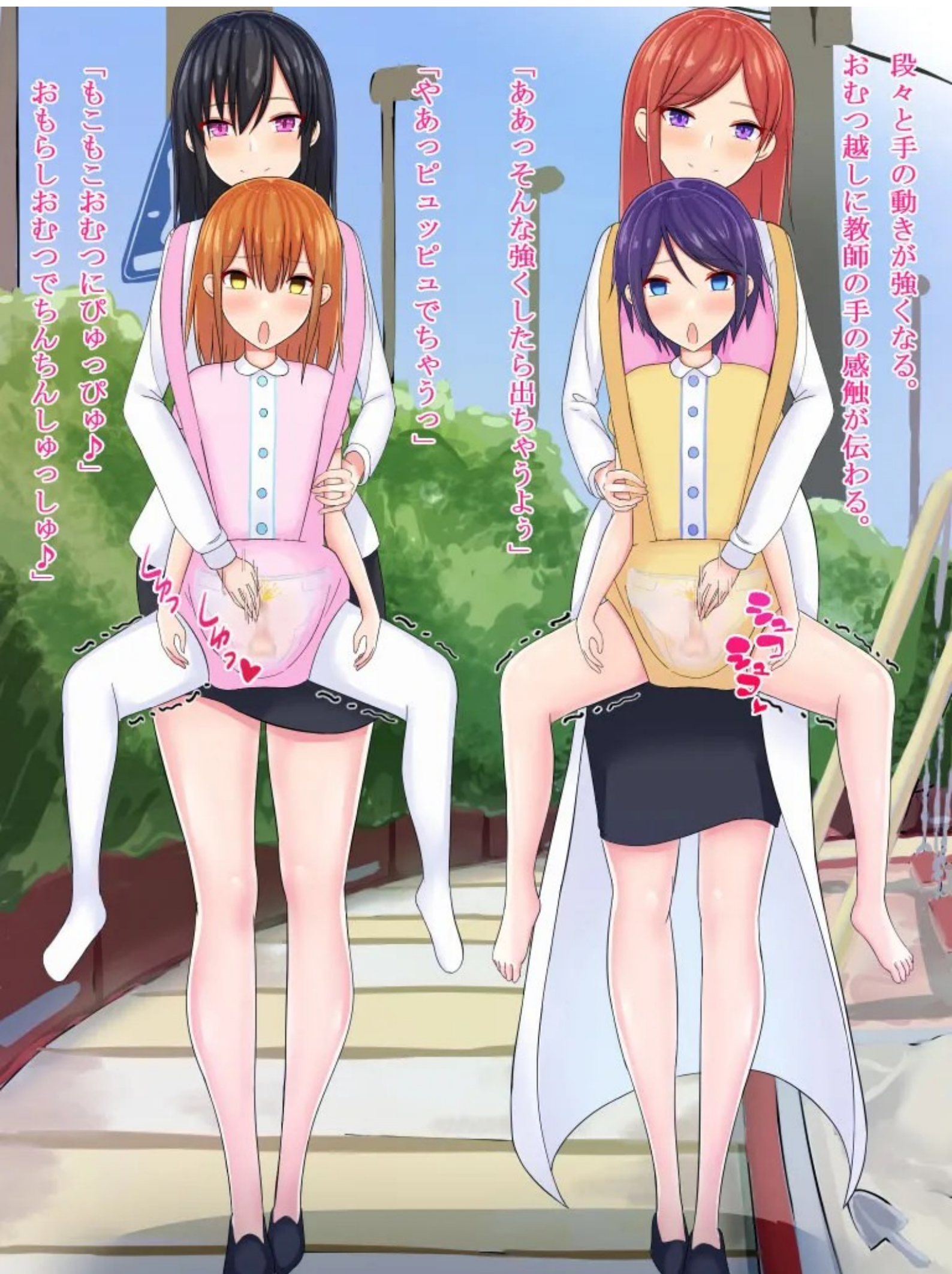
おむつ越しに教師の手の感触が伝わる。

「ああっそんな強くしたら出ちゃうよう」

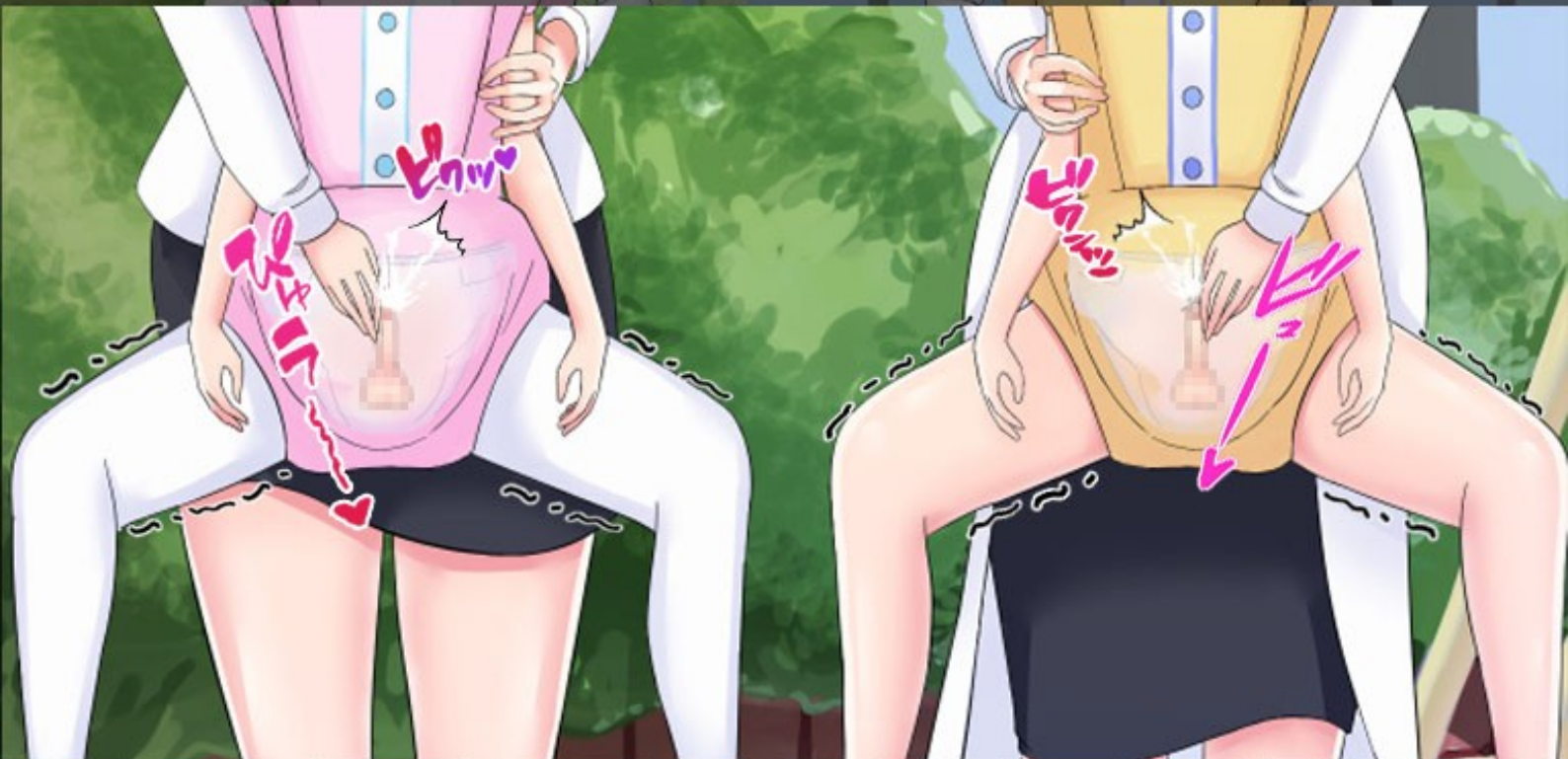
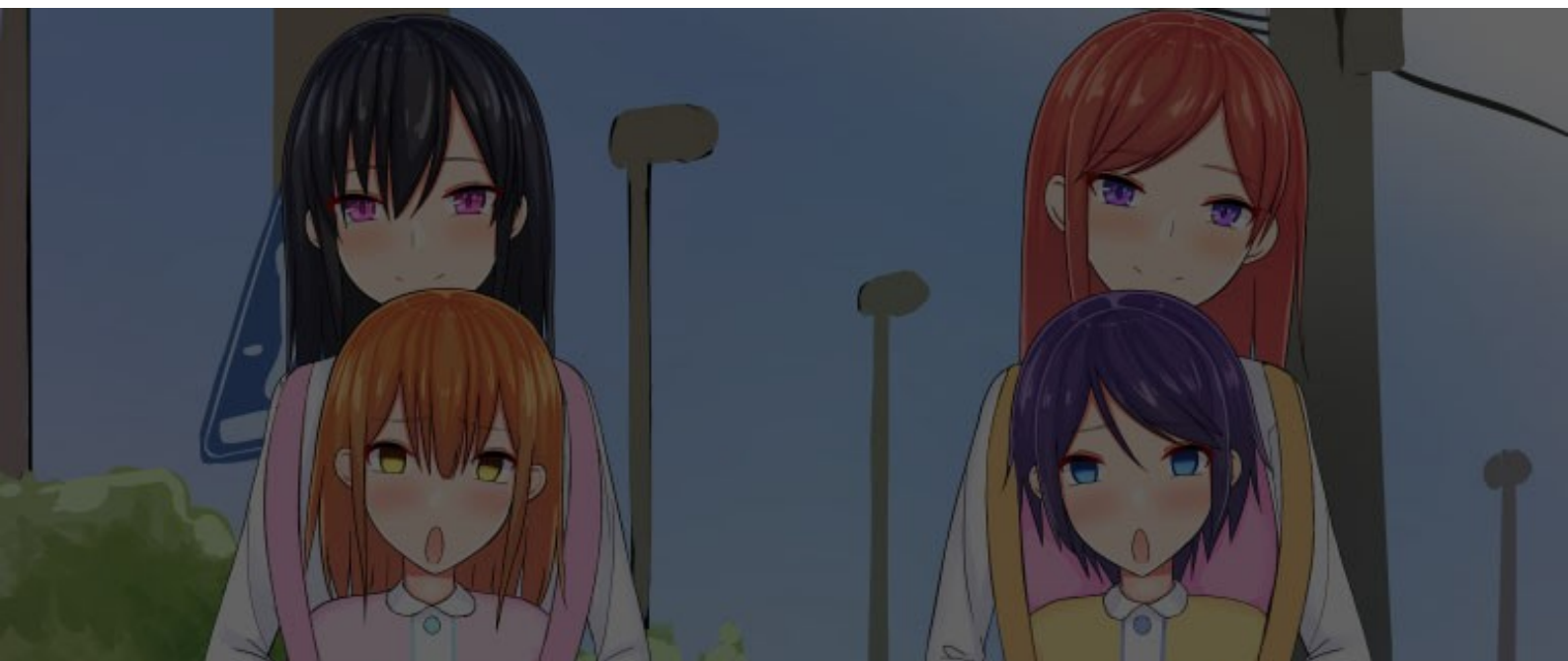
「やあっピュッピュでちゃうっ」

「もごもごおむつにぴゅっぴゅっ」

「おもらしおむつでちんちんしゅっしゅっ」







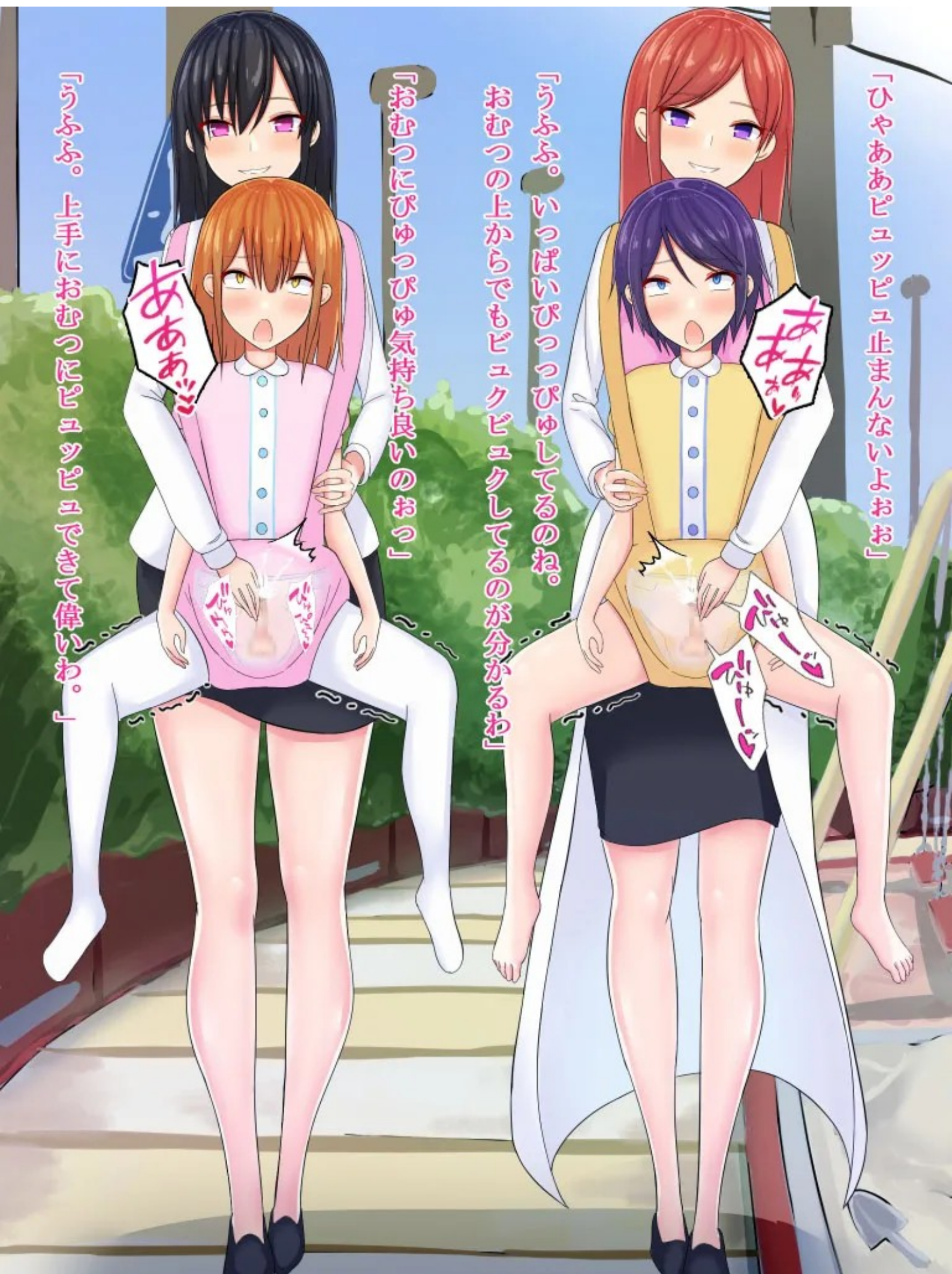
「ひゃああピュッピュ止まんないよおお」

「うふふ。いっぱいびゅっびゅしてるのね。」

おむつの上からでもビュクビュクしてるのが分かるわ」

「おむつにびゅっびゅ気持ち良いのおっ」

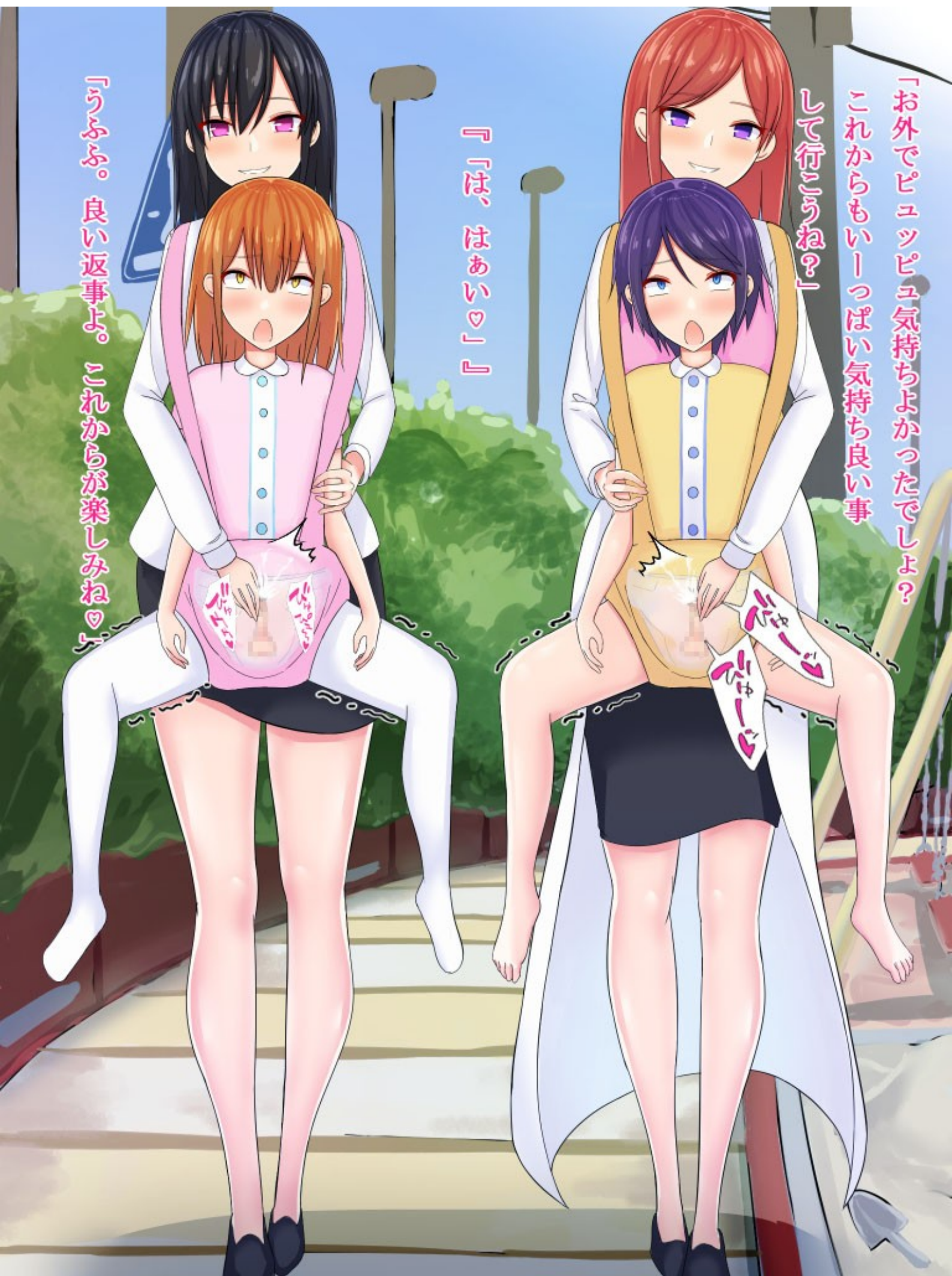
「うふふ。上手におむつにピュッピュできて偉いわ。」



「お外でピュッピュ気持ちよかったでしょ？
これからもいーっぱい気持ち良い事
して行こうね？」

『「は、はあい♡」』

「うふふ。良い返事よ。これからが楽しみね♡」



薫と遥の人格は度を越えた羞恥心により、完全に消え去ってしまった。

そして恥ずかしさなど、もはやどうでもよくなり、

女稚生徒として扱われる事に喜びを感じていた。

赤ん坊のように扱われ、情けない格好で醜態をさらす未来を二人は受け入れてしまった。



きっと近い将来、あなたの世界でも女稚生徒と同じような未来が待っているかもしれません。

男性が可愛らしい女兒服を着て、おむつを穿かされ、情けなくおもらしを繰り返し、射精させられ、挙句の果てには妊娠させられてしまうかもしれません。

こんな世界が当たり前になったらあなたはどう思いますか？
恥ずかしいですか？悔しいですか？それとも嬉しいですか？



いずれにせよあなたが強く望めば、こんな世界といつか出会えるかもしれませんね。

